
あの空へ

叶夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの空へ

【Nコード】

N5452Y

【作者名】

叶夢

【あらすじ】

あなたに相談相手は居ますか？

あなたに恋人は居ますか？

あなたに男友達は居ますか？

その相手に強がっていませんか？

強がって強がって強がって…

我慢できなくなったとき、本当のあなたが見え始める…

君のひと言（前書き）

この話が本当の話か本当の話でないかは…
あなたが決める事です。

君のひと言

「今日の牡羊座の運勢は、恋愛が星二つ。お金も二つ。ラッキーカ
ラーは紫です！」

今日も運が微妙だった…

「菜穂？お弁当…」

「あ…ありがとう」

お母さんに弁当をもらう

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

母子家庭で育った私は、いつもお母さんが泣いてるのを知ってるか
ら今まで反抗期と言うものがない

「菜穂！おはよ」

「うん、おはよ」

こいつは駿。駿も母子家庭でよく気があって相談もし合う仲だ

「今日の気分は？」

「微妙」

「また？」

「そんな朝からハイテンションなひとやじゃない？」
「ま、そのクールさが菜穂の特徴か」

駿のお母さんは、夫に女ができてある日突然居なくなったらしい
それからお母さんがうつ病になって、今バイトでせつせと頑張っ
ているらしい

「今日もバイト？」

「うん。睡眠時間は三時間」

「また？もつとなんかないかな…」

「未成年ってばれてないしあの世界じゃ俺以外とモテるし」
「うん」

治療費や何やらでお金が足りず、駿は夜の仕事をしている

「駿！おはよ」

「おう」

夜の世界だけじゃなくて学校でもよく声をかけられる駿。
ただ自覚症状がないだけ

「今日も英語のノート見せてくれない？」

「たまには自分でやれよ」

「うん…ありがと」

最近の女子はそう言って駿としやべるチャンスをつかんでる
…あの子以外は

「しゅんちゃん」

「でた…」

この子は朝から下校時間までず〜と駿につきまとう積極的な美優
この子の特徴と言えばガッツ利した身体に小顔がちょこんとあって、
吊り上がった目。

何よりその甲高い声が印象的

「美優、いいかげんやめねえ？」

「やだやだ！美優駿ちゃん好きだからやめないい！」

朝から猛烈アタック。それをほかの女子は冷ややかに見る

「正直俺が迷惑だなあ…」

「はいはいそんな事言ったら泣いちゃうよ？」

「もう…わかったよ…」

「は〜い席着け〜」

いいタイミングで先生が入って来る

美優と言えば体育の時間なんかもっとすごい

「あたしは特別！」

そう言っつて男子の体育に紛れ込んだり

「駿ちゃんけがさせたのあんた!？」

っつてバスケの試合中に男殴ったり…

そんな姿に先生も若干諦めモード

そんな美優が時にうらやましかつたりする…

もっと駿としゃべりたい。

もっと駿に触れたい。

もっと駿の側にいたい。

そんな気持ちすら届かない

「本当今日も疲れたわ…」

「お疲れさん。駿も大変だね」

「あい 穂 だったら ……」

「…え？」

聞き間違いかと思った

でも、でも、確かに言ったよね

あいつが菜穂ならいいのって…

君のひと言（後書き）

菜穂の気持ち、分かってあげられるひとは、
素直になれば楽になる
と思います

悩みすぎず、前向きに行きましょう！

君の行動

《昨日の事、深く考えんなよ……?》

次の日に送られて来た駿のメール
今日は土曜で、中学の友達の桜と遊んでた

《ダイジョーブ!》

《ま、美優みたいなこより菜穂みたいな子が好きだけどな》

駿はあたしにどう答えてほしいの？

「何そのメール。彼氏？」

「んな訳ないでしょ」

「じゃあ好きなひとか」

「んん…まあ…」

「でもメールの内容最悪だね。放つとけばいいものを…」

「本当そうだよ…」

その日は桜と一日中愚痴って終わると思ってたのに…

《今から会えねえ?》

「はい来た!ちょっと期待して行って来な あたしならいいから!」
「うん…」

桜に別れを告げて集合場所へ行った

「よう……」

「ん……」

「昨日はごめん」

「大丈夫だって！そんな言われたらよけい意識しちゃうなあ〜！」

意識してる事をばれるのが嫌で無理に笑ってみる

「そっか、じゃあ後半日俺に付き合ってもらおうか」

あたしの返事も聞かずに手を引く駿

「ゆ……」

「そう！遊園地！ガキに戻ってみねえ？」

なんかその発言クサイ……

そんな感じでジェットコースターなどの絶叫系に乗った
コーヒーカップに乗った後で……

「ううう……きもちわるい……」

「大丈夫か？」

目の前がくらくらする……

「あっ……」

「おわっ！……！」

その瞬間に駿に抱きかかえられる

「大丈夫かよ」

「ごめっ…」

離れようとした時

「えっ…」

「……」

抱きしめ…られてる？

「なに…」

「今どんな気持ち？」

「ばか…帰る…」

無理矢理はなれて背を向けたとき

「菜穂…」

「なに？あたしの気持ちも知らないで振り回さないでよ！」

「じゃあ菜穂の気持ち聞かせてよ」

「好きだよ！駿事大好きだよ！いつつも美優ちゃんに見せつけられて
苦しいよ！寂しいよ！そんぐらい好きだよ！悪い？！

鈍感！女心全然分かってないんだから！」

今度こそ帰ってやる！！

そう思っって早歩きしても…

「んっ…」

追いつかれて不意に唇が重なった……

君の電話

「本当に?!それから?」

日曜日、また桜に会って街に出た
お昼時なのでちよつとしたカフェに入った

「それからって…送ってもらって…帰った」

「何それ!告白は?」

「あたしが一方的に言っただけ」

「何なの?そいつ大丈夫?」

駿の行動に不安を抱く桜

「どうだろねえ」

「ちよつと聞いてみなよ!あたしの事好き?って」

「そんなの…」

「あたしも親友の事だし、ちゃんと知っときたいし」

「そう?」

「はい、携帯没収」

そう言っつて桜はあたしの携帯で何やらポチポチ押しだした

「はい、これ送るから!」

「えっ!」

《昨日は送ってくれてありがとう》><

《昨日の話だけど、駿はあたしの事どう思ってるか聞きたいな…》

「なにこれ！全然あたしらしくないし！」

「そこが引きつける方法なの！」

「うーん…でも…」

「送信つと」

「あー！」

桜から携帯を受け取った時は送信完了の文字が表示されていた

「桜あー！」

「大丈夫だって！」

5分もしないうちに駿から返信が

《遅くまで付き合わせて送んない男は居ないっしょ！

俺は…菜穂の事、大事な奴だと思ってる》

「どうゆう事？」

「はつきりしない奴！なんでこんな奴…！」

ぶつぶついいながらまた携帯を奪われる

《大事な奴って？それは友達として？それとも好きなひととして？》

「これは無いで ……」

「ハイ送信」

「もお！」

今度は何分経っても返ってこなかった

「都合が悪くなったら返信しなくなる奴なんか信用できるの？」
「……………」

ブルルルルル…

「駿じゃん」

「うん」

「はい……………」

『メールよりこっちのほうが早いと思って』

「うん」

『俺、今まで菜穂には、何でも相談してきたし、本当にいいダチだ
とってた。』

ダチ…

『でも、最近はなんか…そんなんじゃない…もつと…』
「……………」

黙り込んでると、急に桜に奪われた

「さっきからうじうじ、うじうじ！菜穂の気持ち、ちょっとでも考
えた事あんの？！」

菜穂みたいな子が好きだって言うてみたり、突然キスしてみたり、
あたしには君が

何をしたいのか分かんない！この際はつきりしてよ！菜穂の事、好
きな？嫌いな？」

カフェに響き渡るぐらいの声で叫ぶ桜

「…そう…」

しばらくして桜はあたしに携帯を差し出した

「駿君から直接聞きな」

「…うん」

『菜穂…?』

「はい…」

『俺は、菜穂の事、すっげえ好きだ』

「うん…」

『だから、俺とその…付き合ったりする事、考えてほしい』

やっと聞いたこの言葉…

『だめ…かな?』

「そんな訳ないじゃん…ばか…」

無意識に涙が出る

『菜穂?大丈夫か?』

「うん…じゃあ…また明日」

『うん、明日は迎えに行く』

「ありがとう」

機械音とともに駿の文字が消え、待ち受け画面に戻った

「なんだって?」

「付き合おうだって」

「そっか、よかったね！」

「うん…」

本当にこれでいいの？

駿の気持ちは本当のもの？

時間が経つたびにどんどん不安になって行く…

次の日の学校、何がおこるかも知らないまま

あたしたちは帰路についた……

君の唇

「菜穂」

月曜日、家の前に駿が居た

「お…おはよ」

「おはよ!」

そう言うと駿は手を差し出した

「ん」

「何この手は…」

「鈍感はどうかな？」

笑いながら手を握られる

「なっ…あたし…こんなの初めてだし…駿は…なれてるかもしれないけど…」

あ…あたしは…その…」

「緊張してんのは菜穂だけじゃないっつもの」

駿の顔を覗き込むと頬が赤く染まっていた

「かわいい…」

「かわいいって言うな!」

そういつもの通学路を歩いていたら、視線を感じた

「どうして…」

「美優…」

「な…なんで…手なんかつないじゃってんの　駿は…駿はアタシの人だよ」

強張った顔を無理矢理笑顔に変えて話す美優

「美優、俺ら付き合う事になったから」

「うそお！そんな冗談通じないって〜！」

「本当の話」

「……」

笑顔が一変、鋭い目であたしを睨んだ

「絶対許さないから」

そう言つて短いスカートを揺らしながら校舎内に消えて行った

「駿…ヤバイよあたし…」

「大丈夫。俺から絶対離れんなよ」

ドラマでしか見た事ない場面に戸惑うあたし

「おはよ」

2人で教室に入ったとたん、あたしの机がひっくり返っていた

「何これ…」

「さつき、美優ちゃんが来たとたんに机蹴って…」

クラスの友達が教えてくれた

「アンタが悪いんだろ」

教室の端から聞こえた声

「美優ちゃん…」

「何してんだよ？そんな事していいと思ってるのか？」

「だってそいつが悪いんじゃない！」

「なんでだよ？理不尽だろ！」

「なんで？好きだって知ってて付き合ってるでしょ？裏切った同然だよな」

「駿、いいよ。別に戻せば言い訳だし」

マジ切れして停学にでもなったらやだし、と思い、机を直した

「何いい子ぶっちゃってんの？ウケる〜！！」

美優ちゃんがそう言うのと周りの2、3人が笑い出した

「大丈夫か？菜穂」

「大丈夫、大丈夫 それより停学沙汰にしないでよね」

「おう…」

こうして地獄の一日が始まった

「この問題わかるか？」

「はい！菜穂ちゃんがわかるってえ！」

「はあ？」

「じゃあ解いてみる」

こんな問題わかんないし…

駿を見るとバイトの疲れで寝ている

「 $BC = 70(m)$ 」

小声でそう言ったのは

「 $BC = 70(m)！！$ 」

「正解！」

隣の席の隆だった

隆はとにかく賢くて、何でもできるクールな男子

「ありがとう」

「いいよ、でももう少し勉強した方がいいよ」

「う…うん」

「ああ！菜穂が隆と浮気してる！」

また騒ぎ立てる美優

「ああゆう人間は放っとけばいい。気にするな」

「そ…そうだね」

「こら！騒ぐな」

「すいませ〜ん！でもあの2人もイチャつい」
「騒ぐなって」
「はいはい」

授業が終わって駿に報告した

「そっか…ごめん、寝てた」
「あ、いや、大丈夫。答え隆に教えてもらったし」
「あ…ああ…そっか」

その時の駿の顔を見てれば事件は起きなかったのに…

「菜穂！帰ろ」
「うん！」

そう言ってミキミキと音を立てる廊下を歩く

「またなんかあったら本当に言えよ？」
「うん、ありがとう」

下駄箱に手を伸ばしたとき

「きゃっ…!!」
「どうした？」
「これ…」

下駄箱の仲は泥だらけ

「あいつ…！」

「駿？」

「ちよっと文句言ってくるわ」

そう言っ駿は来た場所を戻って行った

「ああ…」

「また美優？」

「へっ？」

振り向くと、眼鏡を光らせながら立っている隆

「ああ…うん…多分ね」

「そ、菜穂も大変だな。でも、不登校なんかになったらもっと勉強わからなくなるぞ」

「その言葉がよけいだよwでもありがと」

「彼氏は？」

「美優に文句言いに行ったって」

「不安じゃないの？」

「え？」

「駿と駿の事好きって言ってる奴とが一緒になっって不安じゃないのか？」

「……」

「行ってこれば？」

隆が眼鏡を中指でクツと上げ、光の反射が当たる

「でも…駿の事信じてるから…」

「そっゆっ問題じゃなくて…あんな無茶する美優相手だろ？」

どんどん不安になって行く

「行けよ」

「…うん」

あたしは駿の足跡をなぞるように廊下を走った

* * * * *

「美優！」

俺は菜穂を置いて教室に戻った

「あ、来た来た。来ると思って待ってたんだあ」

「何考えてんだよ！そんな事してなにになんだよ！」

「なににもなんないよ」

「は？」

美優は静かに俺に近づいてきた

「あたしは自分のためにやってんの。別に駿ちゃんと付き合いたいかそんなんじゃない。」

ただ、菜穂が駿ちゃん側に居る事が気に食わないの」

「おまえ…」

「わかった。もうしない」

意外にいさぎよい美優に不信感を抱く

「駿ちゃんが一回だけキスしてくれたらね」

「…は？」

「選択肢だよ。菜穂を助けるため駿ちゃんがキスするか、菜穂は助けられないからキスはしないか」

「そんな話には乗らねえ」

「じゃあ菜穂がどうなっても言い訳？」

「……」

また一步近づく美優

「さあどうする？」

また一步

また一步…

* * * * *

「駿！」

そう言っつて教室のドアを開けたら

「さすが駿だね…」

「もう…菜穂には手え出すなよ」

「うん。キスしてくれたから何もしない」

……瞬と美優のキスシーンだった

「な…何してんの？」

「菜穂…」

「ふふ…もうあたしは部外者だからあばいばい」

鞆を持って教室を出る美優

「どっいうこと？」

「…」

「あたしら…付き合ったばっかだよ？」

「…ごめん」

「なのに…」

自然に涙が出る

「菜穂…」

「もういい！駿がそんなひとだって…」

「菜穂！」

「駿は…あたしなんかどうでも良かったんだね…本当は美優ちゃん
の事」

「俺の話も聞けよ！」

「言い訳なんか聞きたくない！」

駿の話も聞かずに誰もいない教室を出た

君の唇（後書き）

今回話が長くなりましたあ…
書いてて駿がかわいそうになっ
てきましたたです。

君の気持ち

「そうか。お大事にな」

火曜日。駿に会いたくないのもあって体調が悪いと先生に連絡した

「菜穂。お母さん仕事行ってくるね」

「うん、行ってらっしゃい」

あたししかいなくなった家は静まり返っていた

《菜穂。今日学校休み？》

一時間目が終わったぐらいの時間に駿からメールが来た

《そうだけど？》

反発的に答えるかわいげのない女

《俺のせいかな？》

《かもね》

そこから返信はなかった

「なんなの？何考えてるかわかんないよ……」

やる事もなく静かな部屋が嫌でCDをかけた

く そつと過ぎ去ってく季節のなか
残された僕だけ…

素直に弱さを見せることさえできずにいた
不器用な愛だった

もう一度あのときのふたりに戻れるならば
迷わず君のこと抱きしめ離さない く

中島美嘉のひとり…

付き合つてすぐこの歌詞に親近感を抱くなんて…

「駿の馬鹿…」

ずっと泣いた

前が見えないくらいに泣いた

泣き叫んだ

知らないうちに泣きつかれて眠りについた

ポーン…

ンポーン…

「ん…」

時計を見ると夕方六時

ピンポーン…

部屋の鏡を見ると目が赤く腫れたあたし

「はぁい…」

力なく返事をして玄関へ駆け寄る

「はい…」

「おう」

そこには隆が立っていた

「どうして…」

「明日の連絡がてら見舞い」

「あ…そっか…上がった？」

「いいよ、すぐ帰るし」

「寒気するから…」

「うん…」

無理矢理隆を家に入れた

「で…大丈夫なの？」

「うん…」

「うんって…すっげえ目腫れてるけど…」

「大丈夫」

「そ…」

隆の前にお茶を出す

「で…駿とは…聞くまでも無いか」

「隆は上手にひとの傷に触れるね…w」

「ごめん」

「うっん、いいの。キスしてた。付き合ったばっかなのに…」

「駿のこと、信じてたんじゃないの？」

「そうだけど…あんなところ見たら…」

泣きすぎて涙も出ないと思ってたのにまた溢れる

「駿の話聞いてやった？」

「言い訳なんか聞きたくない」

「言い訳じゃない。駿が言いたいのは言い訳じゃないと思う」

「何それ」

「そんな気がする」

眼鏡の奥の瞳がなぜか悲しそうに見えた

「だから…明日来いよ。学校」

「……」

「駿の気持ち、聞いてやれば…？」

「うん…分かった」

それから隆と明日の予定を聞いた

「じゃあまた明日」

「ん…」

隆が渡したのは一本のペン

「明日菜穂が来ないと俺勉強できないから」

「なにそれ…念押し…？」

「そ。じゃあまたな」

隆が帰ってシャワーを浴びる

「明日は学校行ってやる！！！！」

「ただいま…菜穂…大丈夫？」

隆のおかげで頑張ろうって思えた

でも…壁はそんなに低くはなかった…

君の想い

「隆おはよ…」
「おう」

隆のおかげで来ることのできた学校

「昨日はありがとう。はいペン」
「ん、それやるよ」
「え…いいよ」
「いいから、駿の気持ち聞くまで帰るの禁止」
「…わかった…」

あたしは静かに駿に歩み寄った

「駿…話しが…」
「駿ちや〜ん！」
「は〜い」

…何その仲良し感

「駿」
「なに？」

なんでそんな反発的になってんの？

「話がある」
「言い訳なんか聞きたくないんだろ？」

何なのそれ…！

「なんでキレてんの？」

「昨日…」

「メール？だってあれは…」

「違いえよ」

「じゃあなに？あたしがなんか悪い事したって言うの？！」

朝から最悪…

「ちよつと来いよ」

「なっ…」

無理矢理腕をつかまれて図書室に連れて行かれた

「なに?!」

「昨日俺だつて菜穂の家行つたんだよ！」

昨日…家…？

「隆…入れたろ？」

「今日の連絡とお見舞いに来てくれただけだし」

「…俺ら…ダチの方が良かったな」

何が言いたいの…

「1日だけだったけど…ダチに戻ろう…」

チャイムすらも虚しく聞こえる

「じゃあ…教室戻るな」

前までは駿の側にいたって思ったのに…
駿ともっと話したいって思ったのに…
こんな結末…

* * * * *

重たい気持ちを引きずりながら教室のドアを開ける

「おい、遅刻だぞ」

「すみません」

そう言っただけで席まで歩いてたら…

「菜穂はどうした…?」

言葉を捨てるように吐いた隆

「あ?」

「菜穂は?」

「…図書室だよ」

「早く座れ」

教師の言葉も耳に入らない

「誤解、解いたのかよ」

「うっせえ、お前には関係ねえだろ」

「ああ、ないよ」

「いちいち口出してんじゃねえよ」

「それは自分の彼女を大事にしてから言う言葉じゃないのか」

席から立って殺気立てながら近寄る隆

「お前なんかより俺はもつと菜穂を大事にできる」

そう言っつて隆の鞆と菜穂の鞆を持って教室から出て行っつた

* * * * *

あたしはずつと窓の外を見ていた

「駿の気持ちなんか分かんないよ……」

そのとき

「菜穂」

「隆……」

「帰ろう」

「え……」

そう言っつと鞆を差し出した

「こんな空気の悪い所…抜け出そう」

「隆…成績さがっちゃうよ……」

「もつ遅いね」

子供のよように笑う

「隆はなんでそんなに…あたしのこと…」

「放つとけないんだ。君みたいな危なっかしい子は」

「え…」

「菜穂。駿との傷は俺が癒す」

隆はそう言っただけであたしの手を取り学校を抜け出した

「はあ、はあ…疲れたあ…」

「大丈夫か？」

「うん」

「で、こっからどうする？」

「え！無計画？w」

「いや」

「じゃあどこにでもどろろぞ」

そう言って連れてこられたのは

「プラネタリウム？」

「そう、興味ない？」

「ううん、見たい」

「じゃあ行こう」

『この星座は…』

そっと隆の顔を見ている

「……………」

眼鏡に映った星座がよりきれいに瞬く

隆といると…なんだか落ち着く…

「菜穂…」

「はっ…はい」

「俺、こんな時にこんなこと言うのいい気がしないけど、菜穂のこと…好きかも」

ふわっと香る隆の髪の毛の香り

「隆…」

「俺は菜穂を傷つけたりはしない」

こつちを向いた隆はいつもより倍にかっこ良く見えて…

「でもあたし…別れたばっかで…」

「それでもいい。世間体なんか気にしない」

「でも…」

「俺、本当は大学行って、国家試験受けて、医者のお父さんの仕事継ごうと思ってた」

そのためなら付き合ったりするのも結婚とかもどうでも良かった。

でも、菜穂に会って変わった。ヘンな言い方かもしれないけど運命だっけ勝手に思ってた…

とにかく、今俺が大事にしたいって思ってるのは、世間の目でもなく、自分の将来でもなく

菜穂なんだ…。菜穂が幸せなら俺はどうなってもいい…」

そう言ってくれる隆に…そっとキスをした

駿や隆を弄んでるって言われても仕方ないことをしてるのは分かっている

…もしかしたら隆を利用してるのかもしれない
でも…今はこう言ってくれてる隆だけを見たいと思った…

君の想い（後書き）

すれ違った2人

菜穂に別れを告げた駿。告白した隆。

一週間で起こってゆく事件

三角関係の行方は…

君の涙

「おはよお！」
「ん」

木曜日玄関を出ると駿ではない、隆がいた

「菜穂？」

「なに？」

「菜穂は、男と付き合ったとき、男に引っ張ってもらうか菜穂が引張るかどっちがいい？」

「ん〜と…どっちかって言うと引っ張ってもらう方がいいかな？でもなんで？」

「俺は両方できる設定なの」

そう言うと隆はあたしの手を握った

「……」

「…ちっちゃ…w」

「隆の手が大つきいだけだし！」

「そうかもな」

そんな感じで校門をくぐったとたん

「駿ちゃんと別れたと思ったたら次は隆かあ〜！すごい度胸だね」

「美優ちゃん…」

「隆がかわいそうだと思わなかった訳？」

「菜穂、こんな奴気にしなくていいから」

「あたしは菜穂からでる犠牲者をなくそうと思ってるだけなのに」

…確かに…あたしは駿も隆も傷つけてるかもしれない

でも…隆は気にしないって言ってくれた…だからそんな言い方しないで！

「行こ菜穂」

「美優なんかに何が分かんのか！」

「はあ？」

「あたしはあんたが駿にベタつく前から好きだった。

なのに取っただ奪っただって騒いで、さぞおもしろかっただろうね！あんたからしたら。

でも結局そんなのに当てはまんの美優じゃん！教室でキスしたの誰だよ！

それに隆はその傷から救ってやるって言うてくれた！

その言葉を大事にしたいって思ったからこそこうして隆と付き合った！

なのに何で何も知らない美優なんかにそうやって言われなさいといけないの？

どう考えてもおおかしくない？部外者のくせに！」

ああ…言っちゃった…口の悪い奴って思われたかな…

「な…朝から何あつくなくなってるの？…だいたい」

「あああ、菜穂にここまで言わせるなんて、とことん最低な女だね。俺別に犠牲者になるつもりねえし」

そう言っつて美優に近寄る

「お前見てえな女一生幸せになんかなれねえよ」

あたしたちが立ち去っても呆然と立ち尽くす美優

「…言つてやったw」

「すごいオーラだったねw」

「俺のことヤになった？」

「全然 むしろ好きになった」

「菜穂若干キャラ変わってる」

「あたしのことヤになった？」

「全然 むしろ好きになった」

ラブラブ全開で教室に入る

《菜穂、隆と付き合っただの？》

駿からのメール…教室にいるの分かってるくせに

《そうだけど》

《早くないか？》

何それ…

《気に食わないの？》

《ちよつと…》

《あたし駿が何考えてるか分かんない。ダチに戻ろうって言ったの駿じゃん》

何なの？美優も駿も朝から…

《あのときは…隆に嫉妬してて…》

《でも、あたしと駿が別れてなくても美優とキスしてた事実は変わ
らない》

《今日放課後はなそう》

《なにを?》

そこからメールの返信はなかった

「隆。今日ちよつと放課後待っててくれないかな?」

「いいよ」

「…なんでか聞かないの?」

「何となく分かるから?」

「そっか…駿に話そうって言われたの」

「分かった。ここでいい?」

「うん多分」

そして早くも放課後…

「隆ごめんね」

「…聞き方によって気分悪くしちゃうかもしれないけど、俺は菜穂
を信じてる」

「うん…」

隆もそりゃ不安だよな…ごめんね…

「駿…?」

何となく図書室に来た…そんな気がしたから

「よお」

「ん…」

「…昨日はごめん」

「……」

「まず…美優とのキスは…誤解ってゆうか…その……」

はつきりしない駿

「アピールしたい訳じゃないけど…その、美優があたしとキスしてくれたら菜穂に危害は

くわえないって…してくれないと菜穂がどうなってもいいことだっって言われて……」

「え…それって…あたしのためって事？」

「そ…そう……」

…責め立てた自分が恥ずかしい

「…あと、昨日別れようって言ったのは…隆が家に入って行くの見て…俺じゃだめなんだって…」

嫉妬してたから…っいつて言うのもあれだけど……」

隆の言ってた通り、言い訳なんかじゃなくて…

誤解を解きたかっただけなんだ

「だから…もう遅いかもしれないけど…俺らやり直せないか……？」

…あたしには隆って言う大事なひとがいる

でも駿もあたしのことを思って美優とキスした

あたしのことを好きでいてくれたから嫉妬して別れを告げられた

…それでも…誤解だったとしても…あたしの傷ついた時間は確かにあった

その傷を癒してくれると言った隆との時間もあつた

だから…

「あたしは…駿を選ぶことはできない。あたしには…早いけど隆って言う大切なひとができた。

結局この場面って美優と駿のときと同じなんだよ。あたしは隆のことが好き。

だからこそもし隆がどうなったとしても駿を選べない。ごめんね」

そつと駿の顔を見てみる

「…そつか…そうだよな……うん…幸せになれよ…」

泣いてる…？

「じゃあな…」

駿はうつむきながらあたしの髪をくしゃっと撫でて図書室を出た

「これでよかったの…!」

あたしは図書室内に響くぐらいに叫んだ

* * * * *

あああ…俺って最低な事したんだな…

まんまと美優の作戦にはめられたってわけ…w
ばかじゃねえの…今頃遅いし…

そつと教室のドアを開ける

「……」

そこには隆が机にうつむいて…寝てる？

「菜穂のこと…よろしく頼むわ…」

独り言にしかすぎない言葉

「…お前って意外とイケメンだなww」

寂しい奴って自分で思いながら教室を出る

「俺に全部じゃねえだろ」

廊下で聞こえた隆の声

「駿だつて俺にはできないことがある」

「え…？」

「菜穂のこと守っていききたいとは思っけど、ダチとして接することはできないから」

「……」

「ダチならダチなりの相談の受け方ってのもあるだろ？」

「隆…俺お前のこと好きだわ」

その言葉に隆は気持ち悪いという表情を見せて

「俺は菜穂意外には興味はないね」

と言った

*

*

*

*

*

君の涙（後書き）

いやあいやあ 自分で書いてて隆に会いたって思いますねえ
いやつの設定でできた隆なんですけど、もうたまらんですな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5452y/>

あの空へ

2011年11月20日20時27分発行